

報 告 書



平成 2 8 年 3 月

大津市中心市街地活性化協議会
「湖岸デザインプロジェクト」

「大津市中心市街地活性化協議会」

「湖岸デザインプロジェクト会議」

第2期大津市中心市街地活性化計画（以下、第2期計画という。）では、その基本的な方針や事業を効果的に実施していくため、地域特性からエリアを「湖岸エリア」、「大津百町エリア」、「駅・県庁エリア」の3つに分類している。

その「湖岸エリア」で、第2期計画の活性化目標である「琵琶湖岸・港における集客・交流機能の強化を図る」ために、プロジェクト会議として、大津市中心市街地活性化協議会内に設置された。

平成25、26年度は、「水空間デザインプロジェクト会議」、「湖岸エリア・アートプロジェクト会議」として、それぞれ活動し、平成27年度「湖岸デザインプロジェクト会議」に統合した。

議論の方向

琵琶湖を観光資源として、戦略的にそのポテンシャルを引き出し、賑わいの創出につなげるため、おまつり広場からなぎさのテラスにかけての琵琶湖上において、人々が水に触れ、憩いを感じ、人と自然が共生する水空間の創造を目指し、周辺の水辺環境に配慮して湖上の活用方策を検討し、水空間デザインを提案する。

プロジェクトの目的

湖岸のポテンシャルを引き出す



賑わいの創出

人々が水に触れ、憩いを感じ、人と自然が共生する空間づく



水空間の整備のための計画案作成・提案

「水辺をとらえる研究会」

滋賀県立大学や成安造形大学の協力を得て、「水辺をとらえる研究会」が設置され、プロジェクト会議委員と研究生（学生）が湖岸エリアのあり方や活用方策について、調査、研究、議論が進められてきた。

研究会の設置趣旨

湖岸エリアは、琵琶湖観光遊覧船の乗船場や『なぎさ公園』が整備され、集客の場や市民の憩いの場としての役割を果たしてきた、しかしながら、社会情勢の変化や個人の価値観の多様化に相まって、『賑わい溢れる湖岸』の実現には、新たな取り組みが必要である。

このようなことから、中心市街地活性化協議会においてプロジェクト会議が設置され、新たな湖岸エリアの創造に向けた検討が進められており、この取り組みに対して、滋賀県内にある大学として、親しみある琵琶湖とまちが融合する水辺空間がもたらす「賑わい溢れる湖岸」を目指し共同で研究を進める。

これまでの活動経過

平成25年 7月

大津市中心市街地活性化協議会内に
水空間デザインプロジェクト会議設置
(平成25年度は1回、平成26年度
は2回の会議開催)

おまつり広場からなぎさのテラスに
かけての琵琶湖岸において、湖上の活用方策や水空間デザインについて協議



平成26年 3月

滋賀県立大学並びに成安造形大学の協力を得て、「水辺をとらえる研究会」が
発足 (平成25年度は1回、平成26年度は5回の研究会開催)



平成27年 2月

公開シンポジウム
「大津湖岸なぎさ公園の水空間デザインを考える」
を開催（滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール研修室）
一般参加者26名（委員、事務局等関係者除く）

基調講演

「賑わいを生む水辺空間の活用と良質な景観形成
に向けて」講師：松岡拓公雄 滋賀県立大学教授



「水辺をとらえる研究会」から作品プレゼンテーション

進行 石川 亮 成安造形大学附属近江学研究所研究員
発表 成安造形大学芸術学部芸術学科 学生
滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科 学生



● 平成 27 年 4 月

大津市中心市街地活性化基本計画内で、「水空間デザインプロジェクト会議」と「湖岸エリア・アートプロジェクト会議」が「湖岸デザインプロジェクト会議」となる（平成 27 年度は 4 回の会議を開催）

● 平成 27 年 10 月

大津市の許認可等に関わる各担当者（都市計画、都市景観、公園緑地、建築指導）を呼び、琵琶湖文化館の利活用について、円卓会議を開催

● 平成 28 年 1 月

水辺の利活用について積極的に取り組んでいる大阪市大正区を視察
（説明者 筋原章博 大正区長
内山泰博 総務課政策プロモーション担当課長）



● 平成 28 年 3 月

大津市中心市街地活性化協議会に「湖岸デザインプロジェクト会議」として提言を行う

プロジェクト会議・研究会の共同での議論経過

現地調査（フィールドワーク）

中心市街地の歴史・文化や変遷を確認

グループワーク

水辺を持つ都市や町で魅力になっている要素を研究

外国や国内の水辺都市などを研究

→ 大津市の水空間デザインに取り入れられる要素を探る

水辺空間の機能、賑わいの方策について研究

活用方策の方向性

→ 湖岸なぎさ公園のうち、おまつり広場からなぎさのテラスまでを対象エリアとする

エリアを 「おまつり広場～芝生広場」 「芝生広場～駐車場」 「駐車場～なぎさのテラス」 の3つのエリアに分けて検討する。

琵琶湖文化館のリノベーションを検討する

→ 大津市中心市街地活性化協議会として滋賀県に提案していく

滋賀県立大学と成安造形大学の研究グループが具体的なプレゼンを繰り返し、プロジェクト会議委員との意見交換

空間デザイン模型製作

成果発表

（平成27年2月28日 「大津湖岸なぎさ公園の水空間デザインを考える」）
滋賀県立大学2グループ 成安造形大学1グループ
（発表内容 別添のとおり）

成安造形大学（1案）・・・『自然のふところ公園計画』

○ 駐車場の屋根の上も公園の一部として活用する。

『琵琶湖文化館』は地盤だけを残す。

・カフェスペース・・・公園で遊んだ人や周辺のオフィスで働く人が一息つく場所。

・市民の寄付で成り立つ小さな図書館

→ 読まなくなった本や絵本を寄付してもらい、地域に開いた図書スペースを設ける。

滋賀県立大学（2案）

①『水辺の散歩道』・・・それぞれの敷地に異なった機能・空間をつくり、多様なアクティビティを生み出す場所となる。

○ おまつり広場・・・イベントを開く場、日常と非日常いつでもまちの憩いの場に。

○ 多目的広場はイベント時にテントを張り、屋台の商品を食べる場に。

○ 丘をもうけてイベント時には観客席として使用する。

・なぎさ公園・・・景色を楽しんだり広場で遊んだり、イベントにも対応する可変空間。

・琵琶湖文化館・・・リノベーションし、活用する。湖岸利用者が自然と集う大津の文化を発信する、休憩スペースとする。

○ 文化館まわりに木デッキを設け新たな動線をつくる。

○ 1階：情報メディアセンター、2階：カフェ、多目的スペース、3階：展望台、集会室

②『みちみちる』・・・動線の整備によってたくさんの人に満ち、たくさんのお出会い、出来事が満ちてくる

○ ランドスケープ・・・帯状の芝生空間に起伏をつけて丘のようにし、そのなかに各機能を盛り込む。

○ 丘の中にトイレ、駐車場、カフェ、サイクルステーション、ランナーズステーションを設ける。

○丘（屋根）は上り下りが可能で、眺望を楽しんだり、子どもの遊び場にもなる。

○サイクルスタンドはデザイナーが考案した、オブジェのようなサイクルスタンドが開発されている。

- ・水面・・・浮き桟橋を作り、水上を歩くことができる道を作る。同時に浮き桟橋の下でイケチョウ貝の養殖を行う。イケチョウ貝は、水質浄化機能を持つと共に真珠を生産する。⇒ 環境に配慮。
 - ・琵琶湖文化館・・・波の形をイメージし、琵琶湖ホールとの統一性を考えた。
- 内部は銭湯、食事、インフォメーションなどがあり、旅の疲れを癒したり、交流の場とする。



2015.3.1 京都新聞

大津市中心市街地活性化協議会「湖岸デザインプロジェクト会議」は、これまでのプロジェクト会議における研究や「水辺をとらえる研究会」の発表をもとに、「**なぎさ公園おまつり広場～なぎさのテラスのエリア**」とエリア内の中心的な建造物である「**滋賀県立琵琶湖文化館**」について、提言を行う。

大津市中心市街地活性化基本計画
「湖岸デザインプロジェクト会議」からの提言
(エリア全体と琵琶湖文化館に分けて提言)

「なぎさ公園おまつり広場～なぎさのテラス」の 湖岸エリアのあり方について

エリアの重要性

このエリアは、古くから琵琶湖の中心であった大津港が隣接し、現在も大津港を拠点として、多くの遊覧船等が航行する。商業施設や文化施設も集積し、また前方に広がる景色は、湖とは思えない景観である。琵琶湖の中でも南湖は幅が狭いが、海のような眺めで、このエリアからの視界は前方180度湖面や湖岸が見渡せ、西は大津港から唐崎、坂本、雄琴、堅田、正面には琵琶湖大橋、東は草津市や守山市の湖岸が眺められる。

また、アクセスの点でも、JRや京阪電車の駅から徒歩で行くことができ、名神高速道路のインターチェンジからも近い。京都や大阪からお越しになるにも交通至便のエリアである。



琵琶湖の中でも、このエリアは
拠点となるエリアである。

これらのことを踏まえ、また「水辺をとらえる研究会」の発表をもとに次のとおり提言する。

1

「ビワイチ」の拠点
→スタート地点（ゴール地点）とする

拠点としての施設整備をする。

2

ウォーキング、ジョギング、サイクリングに利用されることが大変多い
利用者のための施設を設置する。

- ウォーキングステーション
- ランナーズステーション
- シャワールーム
- サイクルステーション など

3

琵琶湖文化館の地点で動線や公園（空間）の連続性が途切れる
歩行者や自転車利用者等がいったん
狭隘な歩道へ出ないといけない

デッキ、栈橋、歩道の拡幅等により、
動線を確保し、連続した公園（空間）にする。

（琵琶湖文化館は次章参照）

4

年間を通じてイベントの開催できる
場所を確保し、インフラを整備する

滋賀県立琵琶湖文化館のあり方について

施設概要

建築年度	昭和 35 年（築 55 年）
構 造	鉄筋コンクリート造 地上 5 階 地下 1 階 エレベーターなし
用途区域	市街化調整区域（都市計画法） 市街地水辺景観区および水辺景観特別地区（景観法）
占 用	河川法、港湾法による占用許可を受けている
延床面積	4, 7 9 3 m ²

施設のこれまでの経過

- ・昭和 3 6 年 3 月開館（築 5 4 年） 博物館、文化財受託庫、水族館、植物園、プール、レストラン等を備えた複合施設として、県内外の多くの寄付を得て開館
- ・平成 2 0 年度 休館
施設の老朽化、耐震対策、バリアフリー対応のため
- ・平成 2 1 年度 滋賀県「公の施設見直し計画」により機能廃止
- ・平成 2 5 年度 新生美術館基本計画が策定され、新生美術館への機能継承が決定
- ・平成 2 7 年度 滋賀県庁内で利用需要調査を実施 → 需要なし
- ・平成 2 7 年度 大津市に活用意向調査
- ・平成 3 1 年度 新生美術館開館

施設の現況

- ・（公財）滋賀県文化財保護協会に管理運営委託
- ・平成 2 7 年 4 月 1 日～平成 3 2 年 3 月 3 1 日まで占用許可

課 題

- ・耐震診断されていない
- ・琵琶湖の占用期間が満了し、廃止の場合は現状回復が原則
- ・土地でないため、場所の譲渡は不可
- ・用途を変更する場合は、新たな占用許可が必要
- ・建物の利用には、建築基準法等の既存不適格が多数想定される

利活用への考察

最も大きな課題は、構造（耐震）であり、現状のまま利活用するのは極めて困難である。石垣に見える部分も建築物であり、耐震が必要である。

耐震補強は、地盤面より上の部分が対象であり、地盤面より下は対象ではない。上部構造を残しての利活用方法は考えにくく、上層部分を撤去して、上に積まないというのが、最も経済的な選択である。

上部を撤去し、土台だけ残して改修する方法が構造的、耐震的にも有効であり、経費としても抑制できる。

当該施設は、湖岸なぎさ公園をつなぐ重要な箇所に位置することから、湖岸のにぎわいと活性化にあたって、利活用への検討は重要である。

用途を変更するにあたっては、新たに占用許可を受けることが課題であることから、現実的に占用許可を受けられる可能性がある申請者や施設であることが必要である。

その点、公園施設であれば公共性があり、また湖岸なぎさ公園で地形的にこの地点だけが狭隘で危険であるという恒常的な課題が、通路整備や栈橋などによって解消され、利用者の安全確保が図れることから、占用許可を受けるにあたって、理解が得られやすいのではないかと考える。

湖岸からそこへわたるデザインも重要であり、栈橋的な構造物についても付加的な要素として検討が必要である。

これらを踏まえて、「滋賀県立琵琶湖文化館」について以下のとおり提言する

1

建築物の管理者である滋賀県が、上部（建築物）を撤去する



道路高さ(歩道高さ)



2

大津市が引き継いで公園として占有し、滋賀県が新たに占用許可する

3

公園には、大津市や民間企業が新たな構築物を建設し、湖岸エリアのイベントや商業活動の場などに活用する

具体的な機能としては、

- A 湖上カフェレストラン
- B 展望デッキ（テラス）
- C 小さな図書館
- D 銭湯 など

（詳細は添付資料のとおり）

大津市中心市街地活性化協議会
湖岸デザインプロジェクト会議

委員（平成２７年度）

リーダー	秋村 洋	(株)まちづくり大津 取締役
サブリーダー	松岡 拓公雄	滋賀県立大学環境科学部 教授
	石川 亮	成安造形大学附属近江研究所 研究員
	寺田 智次	(株)まちづくり大津 監査役
	山本 進一	(株)まちづくり大津 監査役
		(平成２５年度、２６年度リーダー)
	竹井 信治	(株)パルコ 大津店長